

## R. H. ブライスと川柳

川田 基生

R.H. Blyth and Senryu

KAWATA Motoo Ph.D

川柳は永い歴史をもっていて、日本における風刺詩のなかで最もはっきりした系譜をもつ重要なジャンルである。この庶民文学の過去および現代的意義は、一般に考えられるより遙かに大きい。今東（吉田機司）と西（ブライス）の研究家が深い愛情と理解とをもって共著することも、川柳が好事家の埒内にとどまるものでなく国際的性格すらもっていることを暗示している。

草野 心平

戦前から戦中にかけて、川柳ばなれのした川柳のみ徒に幅をきかせ、わたくしども慨嘆に堪えなかった。その慨嘆派の機関誌『川柳祭』の主催者吉田機司さんが、有名な R. H. ブライス氏と合著したことはまことに私は嬉しい。ブライスさんの川柳解釈は、いかにも独特なものである。

含宙軒 夢声

Senryu is short humorous verse. R.H. Blyth said “Senryu indeed are themselves a way of life. The world is tragic, the world is comic, - not alternately, but simultaneously; and senryu has tried to see the world as serious and humorous at one and the same time, and always, whatever the circumstances may be. We find this kind of thing often in Homer and Shakespeare, not in Virgil or Milton; occasionally in Dante, never in Goethe, almost always in Cervantes, seldom indeed in the Bible or the Sutras. This double, doubled attitude is found all over the world in that great repository of wisdom, humour and poetry, popular proverbs, but senryu are more concrete and particular, more sensuous, more tender-minded; they are satirical, but do not bite or sting. They have a mildness, a sweetness and light which religion might well have imitated.”

This is an essay on Blyth on Senryu.

起きてみつ ねてみつ かやの 広さかな

浮橋

泥足撰『其便』元禄7年（1649年）京都 井筒屋出版

この句は戦前の小学校4年の教科書にのっており、加賀千代の作とされていた。

朝顔に 釣瓶とられて 貰ひ水

加賀千代

ふたつの句は並んで紹介され、若くして夫に先立たれ寂しい毎日をおくる貞女の美しい夫婦愛の句と解釈され、鑑賞されていた。ところが作家佐藤愛子の研究によれば、元禄時代の遊女浮橋の作であるという。お客の来ない遊女の閑散の句である。

川柳というものは、作者の立場、読者の見方で意味が異なってくる。投稿を取りやめようかと迷った。以下、思うところをつづってみて、読んでくださるあなたの示唆を待ちたい。

川柳とはどのようなものか。まず、現代川柳のベストオブベストとされる、玄翁撰「20世紀21世紀川柳秀句11撰」をここに引用する。

「調子どう？」 あんたが聞くまで 絶好調	玄翁撰① (以下G1表示)
ストレスは 仕事じゃないの あなたなの	G2
	『女子会川柳』ポプラ社
かいらしい顔して何をするねんな	G3 西川景子
拝観料 仁王もおいでやすの顔	G4 海老池洋
かんにんな アホのふたりの若い恋い	G5 村上ひろし
	『大阪弁川柳』第三書館
Lだけど Mも持ってく試着室	G6 小春さん
節約は まずは夫のおこずかい	G7 さごじょうさん
	『主婦川柳』宝島社
分譲地 地図になかった坂があり	G8 和風
	『岡山の川柳』日本文教出版
食い逃げの子連れの母は食べていず	G9 淡波
	『番傘川柳一万句集』創元社
いい夫婦 今じゃどうでもいい夫婦	G10 マッチ売りの老女
電話口 「何様」ですかと聞く新人	G11 吟華
	『サラリーマン川柳』第一生命

R.H.プライスはその後期において川柳の研究に多大な関心をよせていた。上記の句をどうみるだろう。また、なぜ川柳だったのであろうか。

ブライスは「皇太子に何を教えているのですか？」というマスコミの質問に「ライフを」と答えている。「英詩を」「英語」ではなかった。英詩、英語を越えるものとしてのライフということであろう。日本人のライフを彼にどう映っていたのだろうか。東京大学、早稲田大学、学習院大学、日本大学などなどブライスは自転車で皇居の他、都心の大学をまわっていた。戦後の当時、どこの教え子も勤勉○そのものであったと推定できる。△権威好きで模倣的×。

日本人のライフを最上◎のものとするために、に欠けているのは笑いと創造性、そう思っていたのではないだろうか。

ジョークにあふれた英語の授業というのはよくある。外国人の英語の先生はよく笑わせてくださる。日本人の英語の先生もジョーク連発で授業中笑わせてくださる方は多い。しかし、その英語の先生も職場で、会議中にジョークを言うか、というとそうではない。日本語でのライフにジョークは少ない。英語という言語空間での笑いは日本人のライフを救えないと考え、ブライスは、日本人自身の伝統的な笑いの文化の発展を考えてくれたのではないだろうか。日本人のライフをより楽しくなるためには、シェイクスピアの喜劇も良いが、川柳がよりさかんになるのがもっと自然、そう考えての川柳研究ではなかったのか。

ブライスは川柳をどうとらえていたのか。しかし、川柳というジャンル、領域はさだめがたくみえる。川柳の識者はサラリーマン川柳は邪道であるという。子規の川柳批判は川柳ではなく狂歌の批判にすぎないという。子規に限らず、川柳を嫌う人は少なからず。

なぜだろう。

川柳をささえていた人種が尊敬されなかったのかな、という気が、今はしている。20世紀の川柳で私が注目したのは、鶴彬と剣花坊であるが、剣花坊について、小説家吉川英治の描写を引用したい。

大勢の吟友（剣花坊門下 主語は吉川）と、柴又の帝釈天へ吟行したり、帰りの道の昼遊びに、俗に吉原では伏見河岸とよばれる辺の安女郎に、ぼくの童貞も、五十銭程度の揚げ代で惜しみなく洗礼をうけてしまった。・・・大学の教授も生徒とも、そこら（吉原）ではよく打つかった。ぼくらは往々剣花坊氏、あの和尚の姿を、その中で発見した。和尚は金持ちをつれていることがある。吉原で最高の稲本、大文字、河内屋などの長廊下へ、ぼくらの汚い足跡が残るばあいは、おおむねそういう天恵な機会であった。

『吉川英治文庫134 忘れ残りの記』講談社

ブライスの研究した川柳は剣花坊一門とは無縁の古川柳であろう。ブライスの大著（全630頁）の『川柳に見られる日本人の暮らしと気質』北星堂 昭和36年

目次は

第1章 川柳概説

第2章 元禄から宝暦 1

第3章 元禄から宝暦 2

第4章 明和

第5章 安永

第6章 天明

第7章 寛政

第8章 享和と文化

第9章 文政

第10章 天保 …… となっており、現在の川柳・黄表紙の研究書の年表は明和2年の『誹風柳樽』初編刊行に始まり文化3年の二代川柳編の『誹風柳樽』三十五編刊行で終わる。ブライスの川柳研究は元禄にはじまり文政、天保と続く。並みの研究ではない。

それでは、古典的な川柳、どんな味のものか。『誹風柳樽』かじってみましょう。

初句 五番目は同じ作でも江戸生まれ	G12	宝暦7年
	にぎやかなこと	にぎやかなこと
かみなりをまねて腹かけやっとなせ	G13	宝暦9年
	こはい事かな	こはい事かな
上がるたびいつかどしめて来る女房	G14	宝暦9年
	けっこうなこと	けっこうなこと

G12：研究書によれば、行基の作と伝えられる阿弥陀仏を安置した六つの寺を巡拝することを六阿弥陀詣でといい、五番目の下谷常楽院だけが江戸にあったことを詠んだ句であるという。江戸の誇り、この句集が江戸生まれであることを冒頭で提示している。

G13：初句の 江戸生まれ をうけて、「雷にへそをとられるぞ」とおどかしながら幼児に腹かけをやっとなせた母親の句。

G14：この句の意味は かつての奉公先へ伺うたびに、どっさり戴き物をせして来る頼もしい女房だ 前句の母からの連想

『誹風柳樽』の味わいは、吉田兼好『徒然草』を江戸の粋で再構築したもの、というのが私の感想です。徒然草はいいけど、好きだけど、どこか陰気で冗長、気取ってる。もっと陽気に元気にテンポよく、すっきりしゃっきり。京都の文芸はさめた日本料理。江戸の寿司やソバのように。

ブライスの川柳研究の独自性は、その羅針盤の原理主義にあったと考えられる。

欧米人による俳句研究の第一人者となったブライスは、次に俳句の対極にある川柳に向かっ

た。悲劇研究ののちの喜劇探索。

ただブライスの場合、研究方法は融合文化論である。あるものをあるがままに「結構でございます」というのではなく、自分にとって最良のものを探し、自分流にうけとめ、という思考が用いられている。

ブライス撰の川柳選択基準を想定するなら

I 禅があること

具体的には 対象が客観的にとらえられている または  
主体が客観的にとらえられている

つまり存在の諸法則がとらえられていること

II 悲劇的でもあり喜劇的でもあること

III しかも具体的、感覚的

IV やさしく 中庸を得て 明るい

さて、上記4条件を満たすものをブライス SENRYU と認定することにしよう。

この文章に引用された14句の川柳の通知表を作成しよう。

現代川柳

古典川柳

	I	II	III	IV		I	II	III	IV
G1	○	○	○	○	G 1 2	△	△	○	○
G2	○	○	○	○	G13	△	×	○	○
G3	○	△	△	△	G14	△	○	○	○
G4	○	△	○	○					
G5	○	○	△	○					
G6	○	○	○	○					
G7	○	○	○	△					
G8	○	△	○	○					
G9	○	○	○	△					
G10	○	△	△	○					
G11	○	○	○	○					

採点してみると、意外にも現代川柳の方がよりブライス基準を満たしている。・・・  
私の予想では現代川柳は ×××△ で、というものであったが・・・

むしろ、日本人の生活の潔さ、明るさ、ユーモアは

新内の岡本文弥師匠

金はないけど芸人渡世 きれいさっぱり暮らしたい

岡本文弥 『ひそひそばなし』三月書房

都都逸の玉川スミ師匠

流す涙とトイレの水は 静かなるほど品がある

株を持ち上げ冗談とばし 総解散も芸のうち

ロングにピアスなにするものぞ カツラとカンザシあるわいな

三味の箱には枕は入れぬ お気の毒だが江戸生まれ

玉川スミ 『ドドイツ万華鏡』くまざき出版社

ブライス先生、都都逸 如何でしたか。

ただ、ブライス川柳への真の出発点は こんな句ではないか。

広いはず 郵便局へ三千里 狂村

藤本西三 『エラブカ・ラーゲル川柳抄』

ウラル山脈に近い収容所に将校ばかり。川柳の会ができた。旧ソ連では思想に改善がみられると日本に近い収容所に移されたと聞く。日本の家族に知らされた連絡先はウラジオストックの郵便局の私書箱。しかし収容所は三千里の彼方にあった。

ブライスは18歳で第一次大戦の兵役忌避により収監。外国人というだけで第二次大戦も神戸で収容所暮らし。そのときの友人隣人を思いだしながら川柳を研究してみえたと思え、暗い気持ちさが去らない原稿書きとなりました。

(エッセイ 2013年12月18日)